

在では、両組ともに10体前後の  
ハウコウを役員のおさんや近所  
の裁縫が得意な方に頼んで作っ  
てもらおうようになっています。ホ  
ウコウとヒイチは、セエノカミが  
倒されたあとで希望者に分け与  
えられますが、かつて需要が多い  
ときは抽選や競りで貰い受ける  
こともありました。また、前年か  
ら予約することができるため、予  
約が多いと奉納されるハウコウ

の数も多くなります。ハウコウは  
そのご利益を授かるために地域  
を越えて県外からも予約が入る  
こともあります。大事にされ、ご  
利益を授かると、ハウコウは、糸  
をほどいて他に縫い直して転用  
するか、ドンドン焼きでお焚上げ  
して道祖神に返します。特に子  
どもが授かった場合は、お礼とし  
て、新しくハウコウを作って道祖  
神に奉納したりしました。



■ハウコウ(上組)

受け継がれていく道祖神祭

平成11(1999)年、これまで  
「成人の日」として休日であった  
1月15日の小正月の日が法律の  
改定によって1月の第2月曜日に  
変わって以降、市域の道祖神祭も  
日を移す地区と向原地区のよう  
にこれまでの伝統を堅持してい  
くところに分かれています。少子高  
齢化や勤め人の増加による働き  
方の変化といった、これまで地域  
社会の土台であった社会環境が  
ここ数十年で大きく変わってき

ます。年によっては道祖神役を担  
う14歳の子どもや世話人を努め  
る42歳の厄年の男性(下組)が  
揃わなかったりすることがありま  
す。また大勢の人手が必要となる  
セエノカミの立て下ろしも曜日  
によってはその確保が難しいと  
ころもでてきています。そのよう  
なかでも、向原地区は祭礼の期日  
を守り、伝統行事として後世に  
受け継いでいこうとしています。  
(ミュージアム学芸員 布施光敏)



■ハウコウの受け渡し(上組)

※参考文献  
・『向原の民俗(上)』富士吉田市民俗研究資料1 1983 富士吉田市教育委員会  
・『向原の民俗(下)』富士吉田市民俗研究資料2 1984 富士吉田市教育委員会  
・『富士吉田市史 民俗編第2巻』1996 富士吉田市  
・『山梨県史 民俗編』2003 山梨県  
・『神道事典』國學院大學日本文化研究所編 1994 弘文堂

FUJISAN MUSEUM  
ふじさんミュージアム

ご案内

開館時間 / 午前9:30~午後5:00 (午後4:30迄入館可)  
休館日 / 火曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、  
年末年始  
観覧料 / ◎御師旧外川家住宅との共通入館券:  
大 人400円(団体320円)  
小中高生200円(団体160円)  
◎富士山レーダードーム館・御師旧外川家住宅との  
共通入館券: 大 人800円(団体600円)  
小中高生450円(団体350円)  
交通案内 / ●中央自動車道河口湖ICより車で15分  
●東富士五湖道路山中湖ICより車で10分  
●富士急行線富士山駅より山中湖方面バス15分「サン  
パークふじ」または「富士山レーダードーム前」下車  
駐車場 / 西側駐車場: 普通車35、バス6  
東側駐車場: 普通車20、バス5、身障者1



博物館付属施設  
御師 旧外川家住宅のご案内  
〒403-0005  
山梨県富士吉田市上吉田3丁目14-8  
TEL 0555-22-1101  
観覧料 / 大 人 100円(団体80円)  
小中高生50円(団体40円)  
※ふじさんミュージアムのチケットで  
入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ  
出た溶岩台地一帯を指すこの地方のこ  
とば「丸尾」からとったもので、丸尾とは  
溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変  
化)したものとされています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665 ホームページ URL ●http://www.fy-museum.jp/  
2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJISAN MUSEUM 発行/平成30年3月31日 印刷/K2・ONE

Contents

・博物館Report …… 1-8



■御神木の運び出し(上組)

向原の道祖神祭

毎年1月13日~17日にかけて  
市域では各地区で道祖神祭が  
おこなわれています。なかでも  
向原地区の上組・下組では、古  
くからの祭り行事が引き継がれ  
ています。昭和58、59年に刊  
行した民俗研究資料-向原の民

俗(上・下)-(富士吉田市市史  
編さん室)には、当時の上組、下  
組での聞き取り調査の内容がま  
とめられています。当時の調  
査から35年を経過しています。  
現在の状況を確認し、記録に残  
すため、ふじさんミュージアム

(教育委員会歴史文化課)では、  
平成29年と30年に民俗調査を  
実施しました。このレポートで  
は、過去の民俗調査と合わせて  
祭り行事の内容を紹介します。

博物館Report

小正月行事

市域では小正月を十五日  
(ジュウゴンチ)正月と呼んでお  
り、向原地区では十五日正月に  
対して元旦を若正月と呼んでいま  
す。この小正月におこなわれる  
行事のひとつである道祖神祭は1  
月13日から17日が祭日となっ  
ています。現在、道祖神祭を執り  
行う各地区のなかには、休日に  
合わせるようになり、年によって祭日

が変わるところもみられます。こ  
れは数十年前まで自宅に工場を  
持つ機屋が多くあり、曜日に関  
係なく祭りを実施していましたが、  
近年では、機屋を止めて勤めに出  
る家が増えたため、平日では人手  
不足になってしまったからです。  
しかし、向原地区では祭日や規模  
を変更することなく、伝統的な日  
程で現在も実施しています。

向原地区は、上組(上村)と下  
組(下村)の二つに分かれていま  
す。古くはこの道祖神祭は向原  
地区全体の祭り行事でしたが、  
第二次大戦後、家数の増加や  
諸々の事情により上組下組で  
それぞれ執り行うようになった  
といわれています。

道祖神祭の組織

上組は「世話人」と呼ばれる道祖神祭の指導的立場のメンバーが中心となりますが、毎年役員を選出して祭り行事全体を取り仕切ります。役員を中心とするは「頭取」で、他に「副頭取」、「会計」という役職が割り当てられます。頭取1名、副頭取2名、会計4名で執行していましたが、個人負担軽減のため、ここ数年で副頭取と会計を増員しており、平成

30年では、11名の役員が選出されていました。現在の頭取の役を受ける年齢は60歳、副頭取や会計はその同級生や親戚、近所の年齢が近い人を選出しています。下組では、「向原下組道祖神御神木保存会」があり、会長、事務局、幹事長という三役を中心に指導的な役割を果たします。これに毎年選出される「頭取」と「世話人」が実働部隊となり

す。頭取は60歳、世話人は42歳と厄年の男性が選ばれます。また、セエノカミ(塞ノ神)を立てる道祖神祭は多くの人手が必要になるため、これまで役をやった人や近所の人たちが集まって協力します。上組、下組ともにその年の頭取が中心となって道祖神祭を取り仕切ります。頭取は自宅を祭日の期間中開放して準備、食事、

休憩など世話をすることになるため家の負担が非常に大きくなります。近年では、家の建替えて昔ながらの広い間取りが得られる家が少なくなっていることから頭取を受けられる家も少なくなっています。現在、下組では頭取の自宅ではなく、下組道祖神がある公民館を詰所として使っています。

道祖神祭の準備

道祖神祭は、セエノカミと呼ばれる道祖神のシンボルを立てることを中心におこなわれ、その準備は前年の11、12月から始まります。顔合わせをした後、縄や紙類(色紙、半紙)、水引など資材の発注、組内への道祖神祭のお知らせなどを年内におこないます。年が明けてから必要となる物品の買出し、セエノカミに付けられるホウコウ(這う子)やヒイチの製作をおこないます。ホウ

コウとは、子宝を祈願して奉納されるもので、赤ん坊が四肢を伸ばしたかたちの人形です。上組内の「ネギサマ(欄宜様)」にオオブサ(セエノカミの柵の四方に上げられる注連飾り)の制作やボンテン(梵天)と呼ばれる青竹の用意、オカタブチコウ(御方打)に用いるヒノキの枝にシデを付けてもらうなどの依頼をします。道祖神に扮した子どもたちが新婚の家を回るオカタブチコ

ウがおこなわれる家々への調整も事前におこなっておきます。また、現在では市役所や警察、消防などの各機関に道路使用許可やドンドン焼きの届け出をします。道祖神祭の執行にかかる経費をまかなうため、各戸からナワダイ(縄代)とよばれる負担金を集めます。下組では1月3日に集めて回り、集め切れなかった場合は13日からお札配りと合わせて回ります。上組では祭日の前週にか

けて集めて回ります。この縄代集めには道祖神役を務める中学2年生が大人とともに回ります。この段階では面や衣装を着けずに家々を回ります。縄代とは、セエノカミを立てるときに縄が必要になるため、古くは各家で縄を供出していたことに由来します。現在では、縄を自前で用意する家は無くなったため、縄の購入資金として集められるものとなっています。

祭日(13~17日)の内容

13日の朝から道祖神祭の準備が始まります。最初にゴシンボク・オシンボク(御神木)に取り付けるボンテン(梵天)や道祖神の飾り付け用の竹を地区内の個人宅から切り出していきます。道祖神の石碑の四方に竹を置き、縄を張って注連飾りを取り付けます。午前8時30分~9時くらいになると各組それぞれにセエノカミの御神木を万年寺から運び出し、飾りつけ等の下準備を終えて午後1時過ぎに立てられます。御神

木は、上組が長さ15mのヒノキの丸太、下組が長さ17mのスギの丸太が使われています。御神木の運び出しや立ち上げは、人力で梯子やハサミと呼ばれる支え棒を使って半倒しの状態で止めながら徐々におこないます。現在、下組では軽トラックを使用し御神木の運搬補助をしていますが、かつては両組とも人力のみで運び出していました。セエノカミが無事立ち上がるとネギサマによる式典が執り行われます。



■道祖神の飾り付け(上組)



■縄代集め(上組)



■道祖神の御幣(上組)



■御神木の運び出し(下組)



■セエノカミ立て(上組)



■セエノカミ立て(下組)



■式典(上組)

13日の夜は、道祖神役の子どもが新婚の家に行き、オカタブチコウという行事がおこなわれます。14日から16日にかけては、お札配りがおこなわれます。これも道祖神役の子どもが組内の各家々をまわって道祖神のお札を配ります。玄関先で天狗が御幣を振って、「家内安全、子孫繁栄、商売繁盛、おめでとうござ

います」と全員で唱えてからお札を渡しますが、厄年の人がいる家には、「厄払い」として家の中に入ってお祓いをおこなう場合もあります。昭和60年代までは13日にセエノカミを立て、14日にオカタブチコウ、15日に厄払い、16日にオケイコイワイ(お蚕祝い)と日によってそれぞれお祓いの目的がありました。オケ

イコイワイは、オカタブチコウと厄払いをおこなった家以外の全戸をお祓いして廻るものでした。古くは「オカイコドッサリ カイゴノオイワイ」と唱え、昭和60年代では「オカイコドッサリ ハタヤノオイワイ」と唱えお祓いをしていました。現在ではオケイコイワイではなく道祖神のお祓いに置き換わっていますが、数多

くの機屋が操業していた当時の社会環境と密接に結びついていたものといえます。

この3日間は夜になると「ドンドン(ドンド)焼き」がおこなわれ、正月の注連飾り・門松・古札などを各家々が持ち寄って焚きあげられます。

片付けを終えると翌年への引継ぎがおこなわれます。上組では頭取が役員(副頭取、会計)、保存会とともに太鼓を打ち鳴らしながら書類や道具類を持って事前に話を持ちかけて内定をとった新頭取宅へ引継ぎに向かいます。「道祖神様がこちらの家に来たいと言っています」と述べ、新頭取はこれを受けます。その後、

頭取の家で新頭取を迎えて直会をおこない終了となります。下組では公民館にて昼食をはさみながら翌年への引継ぎが同様ににおこなわれます。下組でもかつては翌年の人選を相談により決めていましたが、現在では自治会での組ごとで順番に役員を回しています。



■引継ぎに向かう(上組)



■お札配り(上組)



■お札配り(下組)

17日になると道祖神祭も終わりを向かえ、セエノカミが倒されます。倒す際には立てるとき以上に注意が必要となります。上組では、人力で倒しますが、交

通量の多い下組では、クレーン車を使って事故のないように倒しています。セエノカミを倒すときは、立てるときと同じように梯子やハサミと呼ばれる支え棒を

使って半倒しの状態で止めておきます。このときに柵の竹材やホウコウ、ヒイチをはじめとしたたくさんの飾り付けを外していきます。立てるときと同様に朝から

準備を始めますが、倒す際の片付けは早く、午前中のうちに全て終えてしまいます。

### ドンドン焼き

道祖神祭の14日から16日の夜におこなわれる正月飾りの御焚き上げをドンドン焼きと呼んでいます。昭和60年代では、13日~15日にかけておこなわれていました。このドンドン焼きは、古くは子ども組が薪や門松などのモシツキアツメ・モシツキアツメ(燃木集め)をして回っていました。昭和60年代では中学2年生がその役割を担っていましたが、現在では保存会や世話人などが事前に燃やす分量を用意しておきます。このドンドン焼きの火にあたると風邪をひかない、虫歯にならないといわれ、子どもたちがメーダマ(繭玉)団子を持ってきて炙って食べていまし

た。現在ではメーダマ団子を枝ごと持ってきて焼いて食べる子どもは見られなくなりましたが、かつては団子を焼いて食べるのが子どもたちの楽しみだったそうです。また、メーダマ団子をつける「ダングバラ」そのものを作る家も少なくなっているため、以前の光景をみる機会がなくなっています。「昔は一晚中火を焚いたものだ」と聞きますが、現在では集まる人も少ないことや防災の点から午後9時くらいを目途に火を落とすようになっています。上組では車の少なかった時代、ドンドン焼きはセエノカミの前の道路でおこなっていたとのこと。



■セエノカミを倒す(上組)



■セエノカミを倒す(下組)



■道祖神に奉納されたメーダマ団子(下組)



■ドンドン焼き(下組)

## 道祖神とセエノカミ

この向原の道祖神祭では、ポンテンやヒイチ、ホウコウなどを飾り付けた御神木をセエノカミと呼んでおり、古くはポンテンザオ(梵天竿)とも呼ばれていました。セエノカミとは「塞の神」のことで、道祖神の異なった呼び方です。この道祖神は集落の外からやってくる災厄(疫病、災害)をもたらす悪いモノを防ぐために村境や辻(道の交差点)に祀られる神で、「境の神」とも呼ばれます。道祖神の御神体は、陰陽石\*や男女1対の双体像、丸い石、石祠などが他地域では多くみられます。富士吉田市内の道祖神は、双体像が幾つかみられますが、自然石に「道祖神」と文字を刻んだ御神体がほとんどです。他地域では、地藏菩薩、猿田彦、庚申などが道祖神として祀られることもあります。また、辻や境に位置していることから中国で信仰された旅の安全を祈願する神である「道祖」に重ね合わせて道祖神として成立したと考えられています。

向原地区をはじめ富士吉田市内の道祖神祭では、この御神木をセエノカミと呼んでいて、かつては市内の各地区で御神木が立てられていました。道祖神祭そのものは現在でも各地区で盛んにおこなわれていますが、大きな御神木を立てるのは、上吉田、新屋、小明見、向原地区だけになっています。また、道祖神祭で御神木を立てるのは富士吉田市や河口湖町、山中湖村などにみられる特徴です。

かつて、御神木立ては組内で役割が決まっており25、42、60才の厄年の男性が担っていました。御神木を立てる位置は決まっており、御神木を立てる穴

は新婚の男性が子どもを授かるために穴を掘るものとされてきました。現在は杓石のようにコンクリートと石で穴が固められています。現在では穴の掃除から御神木の立ち上げまで世話人や参加できる人が総出で担っています。御神木は、上組が長さ15mのヒノキの丸太、下組が長さ17mのスギの丸太が使われています。御神木の運び出しや立ち上げは、人力でおこなわれます。現在、下組では軽トラックを使用していますが、かつては両組とも人力のみで運びだしていました。このような長い御神木に梵天と呼ばれる竹飾りを付けると21~23mもの大きさとなるため、御神木を立てるには大人数の人手が必要となります。

※ 男女の生殖器の形をした石



■セエノカミの飾り付け(下組)



■御神木に括り付けられるホウコウ(下組)



■セエノカミ(上組)



■セエノカミ(下組)

## オカタブチコウ

道祖神祭の13日にオカタブチコウ・オカタブチと呼んでいる行事がおこなわれます。オカタブチコウは、お方(お嫁さん)の尻を打つ「お方打ち」のことで、小正月に子どもたちが粥杖(かゆづえ)を持って新しく嫁いできたお嫁さんの腰や尻を打って妊娠出産を祈る習俗が各地でみられたものです。現在では中学2年生が道祖神に扮して新婚夫婦に「家内安全、商売繁盛、子孫繁栄」を唱え御祝儀をいただく行事となっています。

向原地区のオカタブチコウは、この御祝儀の金額をめぐって2度3度のやりとりが繰り返され、納得がいく金額が出されるまで道祖神たちがヒノキの御幣を畳に打ち付けて暴れます。多く暴れてヒノキの葉がたくさん落ちるほど縁起がいいとされています。また、昭和60年代では、オカタブチコウの執行日は14日夜となりましたが、現在は初日の13日におこなわれるようになっています。



■オカタブチコウ(上組)

## ホウコウ・ヒイチ

ホウコウ(這子)とヒイチは、道祖神祭の前に制作をおこない、13日にセエノカミのお神木に括り付けられます。ホウコウとは赤ん坊を模した人形で子宝と子どもの健やかな成長を祈願して奉納されるものです。ホウコウは、長方形の布の角と角を縫い合わせて手足を作り胴体とし、ほかに適当な大きさの白い布を袋状に縫い縮めて頭となる部分を作り胴体に縫い付けます。胴体部分には少し隙間をあけておき、綿や

籾殻などを詰めます。かつては顔を描きませんでしたが、現在では愛らしい顔を描き、髪や頭巾を被せることが多くなっています。

ヒイチは布を三角形に縫い合わせて中に心棒と藁、籾殻を入れて作られます。ホウコウやヒイチは、厄除けの祈願が込められており、厄年の人が奉納するものとされてきました。ヒイチは火事除け、厄除けとしてもらい受け、玄関や戸口に吊るされます。現

道祖神祭で登場する神は、上組では、道祖神(天狗)、オカメ、荒神、水神、ミソッチョの5神、下組では天狗(道祖神)、オカメと現在では名前が伝わっていない3神を合わせて5神で構成されています。昭和60年代の調査で、下組では天狗、オカメ、デキモッコソウ、ホソツピの4神と報告されています。また、富士吉田市史の記述ではテング、オカメ、サルタヒコなどの面を被って4人一組で回ったとされています。テングとオカメは両組ともに変化がありませんが、他の面については名前がはっきりと伝承されていませんでした。

セエノカミを依代として他界からやって来た来訪神を道祖神が引連れて五穀豊穡、生活の安定をもたらしてくれるものと考えられます。全国的にこういった来訪神の信仰があり、それは天狗面、鬼面、翁面のかたちをとることが多くみられます。向原地区の道祖神役である天狗も本来は来訪神であったものが、道祖神と合わさって今に伝わっているものになったと考えられます。

※ 註  
 粥杖とは、正月十五日の粥を煮るときに用いた箸などの棒のことで女性の尻を叩くと子を授かるという俗信が古くからありました。『日本大歳時記』1984講談社



■道祖神の面(下組)



■ホウコウ作り(上組)